



学芸員の視点 ②③

開館10周年を迎え、子どもを対象とした事業を振り返る
—— 遊免寛子

特別寄稿 ④⑤

展覧会“編集”後記—
「フィンランドのくらしとデザイン」展に寄せて—
—— 橋本優子

ショート・エッセイ ⑥

「チャンネル3 河合晋平博物館」を振り返って
—— 岡本弘毅

トピックス ⑦

「現代絵画のいま」展 関連事業
フォーラム あさっての美術館
2012年度コレクション展Ⅲ小企画
「赤鉛筆のアウトサイダー 小幡正雄展」関連イベント

美術館の周縁 ⑧

東アジアの近代美術調査 —— 鈴木慈子

ART RAMBLE

コレクションから

ロンドンに生まれ、パリやニューヨークで有名な「アトリエ17」を開設し、生涯に450点を超える作品を生み出した版画の巨人ヘイター。彼が20世紀半ばに考案した一版多色刷法は、版画史における技法上の一大革命として知られ、その出発点となった記念碑的作品が本作です。

画面の左側には環状のモチーフ、右側には十字架状のモチーフが置かれ、ビュランの刻線がそれぞれと絡み合いながら半具象的な人物像を一對ずつ形成しています。また、左のモチーフの内部には、小さな子供のような像を認めることができます。

そこまでが3段階のステートで作成された上に、第4ステートとして、ソフトグランドエッチングによるテクスチャ、ビュランによる追加の線、シルクスクリーンによるオレンジ、緑、赤紫の色面、スコーパー（円鑿）による線が被せられます。昨年度当館

に収蔵されたのは、この段階までのトライアル・プルーフです。完成作では、さらにスコーパーとシルクスクリーンによる加筆と修正が施されます。

第二次大戦前後のヘイターの作品は、いずれも線と面の拮抗によって独特の緊張感や不安感を内包しますが、本作に見られる激しいハトスの表出は、一人息子を若くして結核で喪うという個人的悲劇に由来するものです。苦悶に身を振じらせる左右の人物たちは、左右に引き裂かれた構図とともに当時のヘイター夫妻の心情を反映しています。幼子のイメージは死者の清浄な魂を表したものでしょうか。

（岡本弘毅／当館学芸員）



スタンレー・ウィリアム・ヘイター（1901-1988）

《五人の人物》

1946年

ビュラン、ソフトグランドエッチング、スコーパー、シルクスクリーン・紙

37.5×60.1cm

平成23年度長谷井祥男氏・長谷井艶子氏寄贈

©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2013 E0282

開館10周年を迎え、 子どもを対象とした事業を振り返る

遊免寛子

「いつでも どこでも 誰とでも。」

これは、一昨年、当館で開催されたチャンネル展でご紹介したイチハラヒロコ氏による「恋みくじ」第十番のお告げである。恋においては実行困難なこのお告げは、しかし、美術館教育においては理想のことばである。

筆者が8年余り美術館の教育普及活動に携わり、今、実感していることは、美術館教育というものは、基本的には来館者から求めがあった時に、その場で個別に提供されるべきものであるということである。しかし、学校の団体鑑賞の対応や出前授業、学生の職場体験や博物館実習等、学校教育との連携が美術館の教育普及活動の大部分を占める現状では、来館者それぞれへの個別の対応が難しい。ならば、来館者のニーズを分析し、最大公約数的な教育的プログラムを提供することが最善の策であろう。今回は、日々、試行錯誤を繰り返しながら実施している当館の教育普及活動の一端を紹介したい。

兵庫県立美術館では、対象により様々な教育普及活動を行っている。それらの活動をおおまかにまとめると以下のとおりとなる。

- ① 子ども・親子を対象とする「こどものイベント」や「おやこ解説会」
- ② 学校の児童・生徒を対象とする「団体鑑賞」
- ③ 学校の児童・生徒を対象とする「出前授業」
- ④ 中学生～大学生を対象とする「職場体験」
- ⑤ 博物館学過程を履修している大学生を対象とする「博物館実習」
- ⑥ 18歳以上を対象とする実技講座「美術講座」
- ⑦ 16歳以上を対象とする公募展「県展」
- ⑧ 18歳以上を対象とする「ミュージアム・ボランティア」活動のサポート



「空を描こう!光を描こう!」鑑賞風景

- ⑨ 高校生以上を対象とする「芸術の館友の会」の企画運営
- ⑩ 教員を対象とする「特別展教員対象解説会」や「研修会」
- ⑪ 展覧会に関連する講演会、解説会、コンサート等の企画運営
- ⑫ 展覧会に関連していない講演会、コンサート、舞台芸術、映画等の企画運営
- ⑬ 外部団体の展覧会や講演会等に会場を提供する貸館事業

これらの事業の中で教育普及担当学芸員である筆者が中心的に携わっているのは、①～③、⑤、⑨、⑩である。開館10周年を迎えた今、当館のこれまでの教育普及事業、特に①の子ども・親子を対象とする事業について振り返ってみたい。

「こどものイベント」は当館の前身である近代美術館時代より引き継がれた最重要事業のひとつである。1970（昭和45）年に開館した兵庫県立近代美術館は、1973（昭和48）年度には普及課が新設された。これは、当館が設立当初から教育普及事業を重視していた証である。1980（昭和55）年度には、「中・高生のためのデッサン教室」が開かれている。その後1982（昭和57）年度に先進的な事業「明日への美術館を求めて—美術劇場」が開催される。その中では、子どもが自由に作り、遊ぶ、クリエイティブな子どものためのワークショップ「子どものひろば」が行われた。“美術館を、大衆が気軽に憩い、遊び、美術を楽しむ開かれた場にするために。美術と観客の生きた出会いの場にするために。これからのあるべき美術館像を模索して^(注)”「明日の美術館を求めて」は開催された。翌年からシリーズ化された当事業の中で、毎年「夏休みこども美術館」と銘打った企画が開催され、ワークショップとパフォーマンスが行われ人気を博した。

1992（平成4）年度、学校週5日制導入に伴い「ミュージアム・マンズリー」が始まる。学校が休みになった土曜日に社会教育施設を活用してもらうことを目的に行わ



「空を描こう!光を描こう!」制作風景

れた当事業は、「美術館はこわくない」、「いろんなかたちをさがしてみよう」等、学芸員が各回趣向を凝らしたテーマで行う単発型の鑑賞講座であり、小・中学生を対象とした館独自の本格的な鑑賞教育の第一歩だったともいえる。1993（平成5）年度には「博物館学習推進員制度」が導入され、普及課の学芸員と、図工・美術の専門知識と技術を持った学習推進員が共同で企画運営を行うようになる。ほぼ月に一度のペースで、小・中学生を対象に、制作と鑑賞を組み合わせた内容で実施するという形は、現在実施している「こどものイベント」に通じるもので、子どもを対象としたワークショップの基本がここで固まったといえる。その後、2000（平成12）年度には、学習推進員制度の廃止と、それに代わるミュージアム・ティーチャー1名の配置が行われる。子どもを対象としたプログラムも統合され、「子どものためのイベント」（現在は「こどものイベント」）となった。この間、実施に際してミュージアム・ボランティアの協力を得ることが出来たことも大きな出来事であった。

そして、2002年4月に兵庫県立美術館が開館する。この10年間の当館での教育普及活動を振り返ってみると、こちらに移転してきた時点で、代々の普及課担当学芸員及び職員たちの膨大な知識と経験の蓄積の元、既にひとつの完成形をみていた事業も、時代の変化や来館者のニーズと共に変化していることがわかる。当初、「こどものイベント」は、鑑賞と制作を組み合わせた内容で、月に1度、午前1時間半、途中1時間のお昼休みを挟んで午後2時間半の計5時間の活動時間で行っていた。制作ではカッターナイフを使うことが多いので、小学校3年生から中学校3年生までを対象とした。しかし、より多くの子どもや家族の来館を促進するという館の方針に従い、2006（平成18）年度より、小学校低学年も参加出来るよう、対象枠を拡大した。それに伴い、低学年の子どもたちが集中出来る2時間単位のイベントを新設。活動時間の短縮により、展覧会の鑑賞に特化したものも行うようになった。この変化は、低学年の参加を求める保護者からの要望に応えるものであったが、これまで制作を楽しむにイベントに参加していたリピーターを失うことにもなった。また、低学年には保護者の補助が必要不可欠であることから、保護者も参加可能としたことにより、ミュージアム・ボランティアの「こども班」の活動内容が制限されることになった。そして新たな試みとして、未就学児や大人も参加出来るワークショップ「アートであそぼ!」を開催。館内各所でさまざまなイベントを行う「美術館の日」や「関西文化の日」に実施した。このプログラムは誰もが気軽に工作や鑑賞活動に参加出来る機会として今では定番となっている。更に子どもを持つ家族向けに、特別展の内容を担当学芸員と教育普及担当職員がわかりやすく紹介する「おやこ解説会」を新設。作品画像を大画面に映して、子どもたちの意見を聞きながら鑑賞するスタイルを採ることにより、鑑賞の楽しさと展覧会のポイントが同時にわかる内容を目指した。しかし、学校の授業で行うギャラリートークとは異なり、知らない人がたくさんいる解説会では、子どもたちはなかなか自分の意見を聞かせてくれない。自分で発見し

ながら鑑賞する楽しさを実感してもらいたい思いで企画したが理想の実現には至らず、現在は、担当学芸員のわかりやすい解説を中心に、教育普及担当職員が場を盛り上げる形式に落ち着いてきている。

では、最後に今年度の事業を振り返ってみたい。2012（平成24）年度は、前年度末に「こどものイベント」の大反省会を実施。それらを踏まえた企画立案及び運営を目指した。今年度のイベントは、「アートであそぼ!」、「美術館探検ツアー」、「アートな風をつくってあげよう!」、「おやこ解説会」等の定番イベントは引き続き実施。展覧会の出品作家を講師に招いて行う制作を重視したイベントも2件実施した。教育普及担当職員が中心になって企画運営を行う、展覧会に関連した「こどものイベント」は、展覧会の企画担当学芸員との連携を特に重視した。以前は、教育普及担当職員が企画を行うべきであるという使命感から、展覧会開幕後、実際の作品を見てから具体的な内容を決めていた。しかし、それでは展覧会の広報のタイミングに合わない。そこで、曖昧なタイトルを付け、内容がよくわからない状態で広報していた。その結果、参加者が集まり難く、実施までの準備期間が短いため担当学芸員との連携も疎かになり、内容も十分に練れないという悪循環に陥っていた。今年度は、企画担当学芸員の協力を仰ぎ、共同で企画運営を行った。その結果、いくつかの充実したイベントを実施することができた。特に夏休みに行った「カミュー・ピサロと印象派」展の関連イベント「空を描こう!光を描こう!」では、展覧会の会場で行うギャラリートークを、企画担当学芸員2名と教育普及担当学芸員である筆者の計3名が同時多発的に行うという離れ業を実現することが出来た。これは簡単なようで非常に難しい。ここでいうギャラリートークとは作品解説でなく、学芸員がナビゲーターとなって、子ども達の意見を拾い上げ、作品の世界に入っていく対話をういた鑑賞方法を指している。分かりやすい言葉で、話しやすい場を作りながら、作品に迫るきっかけとなる「問いかけ」や「切り返し」をすることは、なかなか難しいことである。この鑑賞で採り上げたのはピサロが同じ場所を違う時間・季節に描いた作品である。特に空の表現に注目し、ピサロが描く空の表現の豊かさを実感。その後、実際に美術館から見るとその日の空を描いてもらった。子ども達はそれぞれ自分が見て感じたその日の空を描いていた。それは作品の鑑賞が表現を刺激した幸福な時間だった。

美術館の教育普及事業を充実させる最も大切な要素は、事業を共に行う職員間のコミュニケーションとチームワークだ。チームで取り組むことで個人の能力を遙かに超えた事業を実現出来る。「できることは山ほどある。」イチハラヒロコ氏のことばによる作品は、やはり美術館教育に当てはまる。

（ゆうめん・ひろこ／当館学芸員）

（注）兵庫県立近代美術館ニュース『ピロティ』No.43 p.8



定番イベント「アートな風をつくってあげよう!」

学芸員の視点

展覧会“編集”後記—— 「フィンランドのくらしとデザイン」展に寄せて

橋本優子

「フィンランドのくらしとデザイン」展の開催にあたり、編集者として関わらせていただいた。この展覧会を通じて、フィンランドのデザイン文化の魅力を多くの人に伝えることができた。また、展示の準備や会場での対応を通じて、スタッフや来館者の皆さんとの交流も大変楽しかった。この機会に、フィンランドのデザイン文化について、改めてお話ししたい。

彼らのドレスコードは、もちろん「マリメッコのボーダー」である。アフター・ミュージアムは、アロマの香りに包まれたカフェで、ハーブティと手作りのスイーツをいただく。ここで、「イッタラのティーマ」という定番のキーワードも加わる。彼女の方は、すり切れるほど熟読した「『ムーミン』の文庫本」を開いて独りごつ。これに対して相手方は、CADに慣れ切った掌中で、新品の「アルテックの三角スケール」が手持ち無沙汰である。お互いの脳裏には、「どうして好きなのか言葉でうまく説明できないけれど、とにかく良いんだ。いや、良いんだという感覚の共有が大切で、それだけでつながっている… わたしたちって幸せ?」という他愛のない言葉が行き交う。…何時かは二人で、フィンランドを訪れて見たいと思う今日この頃。

本展のプレ事業——「『フィンランドのくらしとデザイン』への招待」が開催されるや否や（2012年3月20～28日。渋谷、BUNKAMURAギャラリー）、会場には「そんな典型的な人々」が続々とやって来た。ギャラリー・スペースは決して広くはないけれども、彼らにとって馴染み深い「記号化されたフィンランド・モダン」が居心地良さそうに並んでいる。「言葉でうまく説明できないけれど、とにかく良いんだ」という感覚の共有には、ほどほどの小さな空間、ゆるやかに閉じたワールドが相応しい。マリメッコのファブリックと服、イッタラの食器、ムーミン童話、アルテックの家具に加えて、フィンランドの伝統的なハンディクラフト、ピルタナウハ（リボン編み）やヒンメリ（藁細工）なども「良いんだ…」の一言ですんなり収まる。



カイ・フランク:食器シリーズ「ティーマ」 プロトタイプ1979-1980年 ©Iittala

では、プレ事業でも片鱗が紹介されたジャン・シベリウス（1865～1957年）の静謐な森のロマンティシズム、ヨナス・コッコネン（1921～96年）の抽象化された森のハーモニーはどうだろうか。あるいは、国民的叙事詩『カレワラ』で示される天地創造の秘話について。さらに、荒ぶる自然のなかにあって、無数の湖に浮かぶ、これまた無数の小島に電柱が立てられず、電線が張れないからこそ発達したユビキタなコミュニケーション・デザイン。この状況と、法律によって保証される「フィンランドでは、国民の誰しもが自由に《森》を彷徨して良い。但し、自己責任に於いて」は、表裏一体の話だという気づき。こうなって来ると、いわゆるファン（典型的な人々）は、大いなる不安と違和感を覚えてしまう。

というのも、これらの記号は、ある意味では未知のものであり、なおかつ「良いんだ…」では説明がつかない広大無辺な世界観に立脚しているからだ。さまざまな解釈が可能な「フィンランドの森」をキーワードに、受け手の「他愛のない言葉」を詰問しながら、「フィンランド・モダンの本質と背景」に肉薄することこそが、本展の真の企画目的だった。換言すると、「良いんだ…」という素朴な眩きを否定するのではなく、何故それでは不足・断片的なのか、フィンランドを訪れるならば本当に知り・学ぶべきは何なのかを解き明かし、ひいては「モダン・デザインの歴史に於けるフィンランドの位置づけ」をも再認識する。ゆえに、マリメッコ以下の「定番」と、『カレワラ』や「今日の公共デザイン」を共存させたのである。



iDIS Design + ヘルシンキ市交通局 「新型トラム」 2016年運行予定 ©iDIS Design + Helsinki City Transport

その後、本展の初会場がグランド・オープンし（2012年4月7日。青森県立美術館）、全国五ヶ所の会場（青森・宇都宮・静岡・長崎・兵庫）を巡回するなかで、「典型的な人々」だけに限られない23万8千人以上もの来館者に恵まれた。展覧会というものは、決して数字だけで評価できるものではないが、これほどの成績を上げたことの意義は大きい。すなわち、先に挙げた「本当に知り・学ぶべきは」に来館者が触れるチャンスがそれだけ多かった、という部分に於いて。よりストレートに記すと、これらの人々が何らかのかたちで意識したであろうフィンランド・デザインの正しい理解は、実は「デザインとは何か」「モダン・デザインの歩み・命題と現代へ課せられた事柄」「自然と社会に寄り添うためのしなやかな発想としてのデザイン」をめぐる洞察にも等しい。

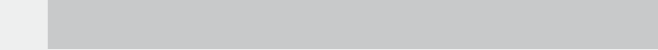
その後、本展の初会場がグランド・オープンし（2012年4月7日。青森県立美術館）、全国五ヶ所の会場（青森・宇都宮・静岡・長崎・兵庫）を巡回するなかで、「典型的な人々」だけに限られない23万8千人以上もの来館者に恵まれた。展覧会というものは、決して数字だけで評価できるものではないが、これほどの成績を上げたことの意義は大きい。すなわち、先に挙げた「本当に知り・学ぶべきは」に来館者が触れるチャンスがそれだけ多かった、という部分に於いて。よりストレートに記すと、これらの人々が何らかのかたちで意識したであろうフィンランド・デザインの正しい理解は、実は「デザインとは何か」「モダン・デザインの歩み・命題と現代へ課せられた事柄」「自然と社会に寄り添うためのしなやかな発想としてのデザイン」をめぐる洞察にも等しい。

たとえば「マリメッコのボーダー」「イッタラのティーマ」は、その色やカタチ、模様が「デザイン」なのではない。同じことは、ヘルシンキ市交通局のトラムと地下鉄についても言えるし、フィンランド郵政が推進する「100%カーボン・ニュートラルな郵便制度」を考えて見るならば、いっそう論点は明確だろう。つまり「デザイン」とは、個々の製品、案件、ブランドを際立たせる「造形上の特質・表現」（スタイリング）以上のこと、要するに「人間がより良く生きるための・社会のさまざまな命題を解決するためのアイデア」、そして「その最適化」である。あるブランドの服や食器を「良いんだ…」と感じる心は素直で結構だが、それは飽くまでも製品（モノ）への偏愛と依存であって、



マリメッコのポーチ各種、ヘルシンキ市内にて

photo ©Curators



ジャン・シベリウスの自郵兼アトリエ「アイノラ」photo ©The Ainola Foundation, Järvenpää

デザイン理解の次元からは程遠い。

また、概念としてのデザインは、「考える⇄つくる⇄つかう」という永続的な循環系の「総体」としても定義づけられるが、この構造に歪みや不具合が起こると、真っ先に一般の人々は、デザインを色やカタチ、模様の話としてのみ捉えるようになる。モダン・デザインが壁に行き当たったのは、それがいっそう深刻となった状況の表れに他ならない。このことを乗り越えるためのヒントは、森を糧とし、社会に寄り添う「フィンランド・モダンの持続可能性」に隠されている。

——全国23万8千人の来館者のうち、どれほど多くの人々がこの真理に気づいたであろうか。それを一人ひとりが自身に重ね合わせ、生活と社会に照らして再考・編集する際に、予定調和なドレスコードや「良いんだ…」という曖昧な眩きは要らない。（はしもと・ゆうこ／宇都宮美術館主任学芸員）

開設準備室時代より宇都宮美術館（1997年開館）勤務。鉄道建築協会会員、武蔵野美術大学非常勤講師。近・現代デザイン、デザイン教育、デザインのミュージオロジー専門。「フィンランドのくらしとデザイン—ムーミンが住む森の生活」展の企画者でもある。「北欧モダン:デザイン&クラフト」展などを企画。「ヴェルナー・バントン作品集」（河出書房新社）ほかを執筆。



アクセリ・ガレン＝カレラの美術工芸品、本展第二会場にて photo ©Utsunomiya Museum of Art

「チャンネル3 河合晋平博物館」を振り返って

岡本弘毅

現在活躍中の注目作家を年に一回のペースで紹介する「チャンネル」展。シリーズ第3回となる今回の「チャンネル3」は、河合晋平（1971-）を取り上げ、昨年11月27日から12月24日までの約1ヶ月間の会期で開催した。企画担当者として、開催に至るまでの経緯と開催後の所感を簡単に述べたい。

大阪府堺市に生まれた河合は、京都市立芸術大学を卒業後、同大学院を経て今日に至るまで京都を拠点に活動続ける造形作家である。彼は長年に渡って合成樹脂を主たる素材とし、自ら「存在物」と呼ぶ独自の技法／作品群を生み出してきた。奇妙な生物を思わせるそれらは、学生時代からの盟友・谷本研氏の命名・分類を経て、擬似生物学的な世界観を与えられてきた。この存在物の体系は、今日までの約20年間拡大し続けて、アメリカやドイツなど海外を含む各地での展示で高い評価を得るに至っている。

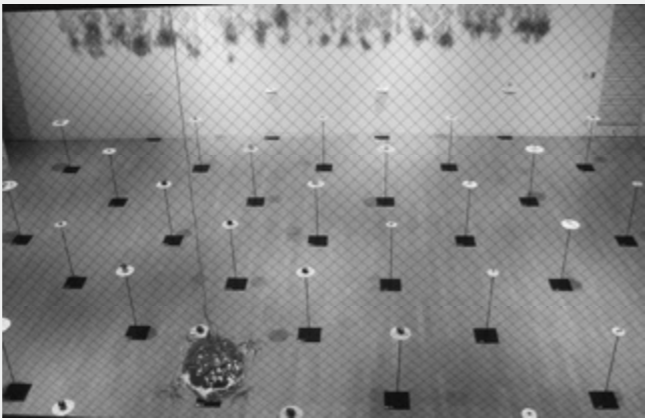
1999年、同じ職場の先輩学芸員から河合の存在を教えられた私は、生々しい色彩と奇妙なフォルムを併せ持つ作品群が作り出す独特の世界にたちまち魅了され、その年に担当していた「美術の中のかたち」展（註）の招待作家のひとりを選ぶことにした。河合はその展覧会に、「ネリツメルト」、「オルプテルアール」、「レイヤロジール」といった当時の制作の主流としていた「存在物」を出品してくれた。なかでも「ワンダーランド」と命名された新作は、1.2×4.2メートルのフィールド内に上記の各存在物が渾然と群生する集大成的な作品であり、会場内でひときわ大きな存在感を放っていた。

しかし、この展覧会で河合を取り上げたことが妥当であったかといえばそうとは言い切れない。というのも、河合の作る「存在物」の魅力の半分がフォルムにあるにせよ、残りの半分は強烈な色彩にあるからである。視覚を使わずに触覚を使った美術鑑賞を旨とする「美術の中のかたち」という展覧会では、河合の作品の魅力は半分しか伝えられなかった。

それは容易に予測できたことだが、当時の私は触覚で「存在物」のフォルムに触れるだけで十分鑑賞が成立するであろうと楽観的に考えていた。が、会場を訪れた晴眼の来場者が、まずその視覚的效果に感嘆の声を上げるのを聞いた時、複雑な感情が沸き起こるのを禁じ得なかった。また、樹脂を細長く伸ばした「アイシクル・ウォープ」のような「存在物」は、多くの来場者の物理的接触に耐えられず、破損することも少なくなかった。

かように、河合晋平はまずもって視覚によって鑑賞されるべき作家である。そのことを見極められなかった私は、作家に対しずっと申しわけなく感じつつ、もう一度彼を紹介する機会を窺っていたところ、十数年の時を経てようやく巡ってきたチャンスが今回の「チャンネル3」であった。

前置きが長くなったが、今回の展示では触って鑑賞するという物理的制約がないため、当館アトリエ1という広い空間をなるべく自由に使うことによって、



会場風景

以下のようなオファーを出すに留めた。まず、十分なスペース的余裕をもって作品を配置すること。これは老若男女、不特定多数の来場者にストレスなく鑑賞してもらうために必須の措置である。当初河合はより多くの作品を出品することを希望していたが、そこは涙を吞んでもらった。

そしてもうひとつ、新作だけでなく近年の代表的な旧作も一緒に展示すること。これは、河合の作品が生物の進化を模したものである以上、通時的な展開を見ることが不可欠であると考えたからである。この提案に対して河合は、過去繁栄を極めたロールパンを樹脂でコーティングした「オルプテルアール」系の作品と近年著しい勢いで進化を続ける透明チューブに繊細な加工を施した「オルガノーム」系の作品を軸とするラインナップで応えてくれた。

河合の作品は、たとえ小さくとも、いや小さいからこそ見るものの好奇心を刺激する色彩と造形の妙味を持っている。今回のような大空間での展示ではその魅力が圧殺される危険性があったが、数度の会場下見と話し合いの後、河合は見事なアイデアを提出してくれた。高さ7メートルの壁面に金網とビニールチューブを垂らし、その途中から「存在物」が発生し、いつしか床の上に配置した個々の展示台上的別種の「存在物」へと分化してゆくという構成案がそれである。

これは、アトリエの三次元的空間を用いたインスタレーション展示と個別的な作品の独立展示を同時におこなうことに他ならず、いわば展示室全体を「存在物」進化の系統樹に見立てたマクロ的視点と個々の「存在物」の特徴を近接して鑑賞＝観察するミクロ的視点を両立させるものとなった。奇妙なクラゲを思わせる「バルジェルビット」がホイストクレーンからぶら下がり、巨大ナマコのごとき「リベントロ・アンプテイン」が壁面備え付けのシンクに蓋^{うご}の様は、未知の海底に潜む謎の生物群に囲まれたかのような錯覚を見る者に与えたのではないか。まさに「Shimpei Kawais Wunderkammer」というサブタイトルにふさわしく、ある母親に抱かれた乳飲み子が、なんとも言えない不思議そうな表情で「存在物」に見入っていたのが印象的であった。

約一ヶ月という美術館の展覧会としては会期が短かったにもかかわらず、それをカバーする十分な広報ができなかったことは作家に対して申しわけなかったが、河合自身がネット上で積極的に告知してくれた助けもあって、ある程度の数の来場者にこの魅力的な世界に触れてもらえたと思う。河合晋平と「存在物」のこれからのさらなる発展と進化を見守っていきたい。

（おかもと・こうき／当館学芸員）

（註）旧県立近代美術館時代の1989年から継続的に開催している展覧会。視覚障害者による美術鑑賞の可能性を拓くことを目標にスタートしたが、近年は触覚や聴覚など視覚以外の感覚による鑑賞を追求する現代美術展の色合いが濃くなっている。

「現代絵画のいま」展 関連事業

「現代絵画のいま」展の関連事業としては、今回の出品作家の方々に登場・参加していただくものを中心に企画しました。現在、活躍中の作家に来館者が接する機会をできるかぎり設けようと考えたからです。

まず、オープン前の昨年9月末から翌月半ばまで、当館アトリエにおいて、渡辺聡さんに、今回の出品作の公開制作を行ってもらいました。これは、展覧会の前宣伝でもありました。次に、オープン初日の10月27日（土）と、会期半ばの11月25日（日）に作家が自作を前にして語るアーティスト・トークを開催しました。10月1日は、平町公さん、丸山直文さん、大崎のぶゆきさん、野村和弘さんの4人、11月25日は、彦坂敏昭さん、横内賢太郎さん、法貴信也さん、和田真由子さん、三宅紗織さんの5人です（発表順）。1日目のアーティスト・トークと同日である10月27日に12月1日（土）と12月24日（月・振替休日）を加えた計3回、石田尚志さんの映像作品の上映会を開き、16mm映画3本、ブルーレイビデオ4本を上映しました。初日のみ、石田さん自身のトークとの2本立てとしましたが、さらに、石田さんからの提案で嬉しいプレゼントがありました。2日目の上映会が始まる前に、美術館屋外で噴霧器によるパフォーマンスを行っていただいたのです。この他、12月8日（土）には、居城純子さん監修による子どものワークショップを開くことができました。小学生3年から中学生を対象にして、線香で紙を焼いて絵を作るワークショップです。

なお、恒例の学芸員によるギャラリートークを11月10日（土）、12月15日（土）に、ミュージアム・ボランティアによる解説会を毎週日曜日に行いました。

（出原 均／当館学芸員）



法貴信也さんのアーティスト・トーク（11月25日）



石田尚志さんのパフォーマンス（12月1日）

フォーラム あさっての美術館

開館10周年を迎えた美術館は昨年12月8日（土）、未来のミュージアム像を展望しようとするフォーラム「あさっての美術館」を開催しました。これは、その前年にやはり開館10周年を迎えた日本科学未来館との共催事業であり、ミュージアムの未来について文科系、理科系という枠を越えた議論を目論んだものです。会場には多数の学生を含む400人を越える聴講者が詰めかけました。

2部構成からなるフォーラムの第1部では、各分野の第一線で活躍する2人の講師によるプレゼンテーションがありました。ひとりとは、伝統工芸から人工臓器などの先端医療まで、幅広いデザインを手掛けるデザインディレクターで医学博士の川崎和男氏、もうひとりとは、社会で活動できる知的システムを持ったロボット開発の



左より毛利衛氏、石黒浩氏、川崎和男氏、養館長

研究者として世界的な注目を集める石黒浩氏です。最先端のテクノロジーに従来の枠組みを越えて関わりつつ、人間生活と社会への洞察や提言を持つ両氏のお話は、とても刺激的でした。

第2部では、この2人に加えて、日本科学未来館館長で宇宙飛行士の毛利衛氏をお招きし、当館の養館長とともに座談形式で議論が進められました。第1部の2人のプレゼンターによる先端的な未来志向の内容に、日本科学未来館の事業にも見られる宇宙的な視野からの教育や美的感性に関する毛利氏の提言が交わり、幅広い議論となりました。

（速水 豊／当館学芸員）

2012年度コレクション展Ⅲ小企画 「赤鉛筆のアウトサイダー 小幡正雄展」関連イベント

2013年2月10日（日）、座談会「小幡さんを語る」を開催しました。ゲストは、社会福祉法人くすのき会ふひふ園の山崎美和さんと、横尾忠則現代美術館の服部正学芸員。本展担当の鈴木が聞き手としてお話をうかがいました。

山崎さんは、小幡さんが1989年から暮らした障害者支援施設の支援員で、その暮らしを身近に見てきた方です。施設職員のみなさんは、利用者の生活全般をサポートしながら、日々の記録をつけておられます。山崎さんは、小幡さんについての記録を詳細にたどり、施設に来たばかりの頃の様子、絵を描いたという記録の最初、数多くの手紙など、新出の資料や情報を次々と紹介してくださいました。その中の小幡語録から、あたたかい人柄がしのばれ、会場は和やかな雰囲気になっていきました。

服部学芸員は、日本におけるアウトサイダー・アート／アール・ブリュット研究の第一人者。この企画展のきっかけをつくったのも彼です。座談会では、小幡さんの作品が海外で評価が高い理由など、長年の研究にもとづく視点から鋭くコメントされました。2010年に急逝した希有なアウトサイダー・アーティストの魅力を発見できるイベントになったと思います。山崎さん、服部学芸員、ご来聴くださったみなさま、本当にありがとうございました。

（鈴木慈子／当館学芸員）



右より山崎さん、服部学芸員、筆者

●—— 編集後記

●今年の冬は、神戸でも雪のちらつく日が多かったですね。そんな寒い季節にも関わらず、「フィンランドのくらしとデザイン」展には多くのお客様にご来場いただき、会場は熱く盛り上がりました。この展覧会を企画された宇都宮美術館の橋本優子学芸員から、展覧会に対する雑感をお伝えいたします。

●当館では、展覧会とその関連イベントに加えて、コンサートや映画上映会、そして教育普及に関わる様々な事業を行っています。この号では、当館が開館以来力をいれて進めてきた子どもを対象とした教育普及事業の10年間を、遊免学芸員が担当学芸員ならではの視点で振り返ります。

●その他、当館ではさまざまな展示やイベントが行われました。また、現在進行中のプロジェクトもあります。各担当者からのご報告をお届けいたします。

（小野）

兵庫県立美術館
quarterly report
ART RAMBLE
VOL.38

2013年3月28日発行
編集・発行：兵庫県立美術館
〒651-0073
神戸市中央区臨浜海岸通1-1-1
印刷：（株）サンメディア

東アジアの近代美術調査

鈴木慈子

美術館の周縁

福岡アジア美術館学芸員のラウンチャイクン寿子氏が企画している「東アジア 美術の近代」展(仮称)のための調査に、当館の飯尾由貴子学芸員とともに同行した。台湾の陳澄波、韓国の李仁星という、重要な画家の回顧展が開催されるのに合わせ、2012年2月に台湾へ、5月に韓国・ソウルへ行った。

台湾や韓国の近代美術は、日本による植民地統治の時代と重なっている。陳澄波と李仁星についても、日本との関係が深い。陳澄波は1924年から東京美術学校で学び、1926年《嘉義の街はずれ》(現存せず)で帝国美術院展覧会に台湾人画家として初めて入選した。台湾の官展、台湾美術展覧会にも何度も入選している。1947年に起きた二二八事件の混乱の中、銃弾に倒れた。李仁星は、大邸の出身で、官展である朝鮮美術展覧会を舞台に活躍した画家である。東京の太平洋美術学校で学び、朝鮮美展で連続して特選となり、1935年には最高賞を受賞。1950年、警官の誤射によってこの世を去った。両者は、植民地時代に活躍し、郷土色にあふれた作品を残している。いずれも戦後まもなく悲劇的な最期をとげた「天才画家」であり、近年、再評価が著しい。

台湾では「行過江南—陳澄波 芸術探索歷程」展(台北市立美術館、2012年2月18日—5月13日)と「切切故郷情 陳澄波紀念展」展(高雄市立美術館、2011年10月22日—2012年2月28日)を見学。陳澄波の故郷、嘉義では、記念室が設置されている嘉義市立博物館で彼の遺族と面会したほか、収蔵庫で旧蔵資料を閲覧。嘉義市内のマンションの一室でドローイングを間近に見る機会にめぐまれ、近くの生家や絵のモチーフとなった通りや寺院をまわった。このほか、顔水龍の回顧展「走進公衆・美化台湾 顔水龍」展(台北市立美術館、2011年12月3日—2012年2月



德壽宮美術館



台北市立美術館

26日)、国立台湾美術館(台中)で近現代美術のコレクションを紹介する「画家風景 国民風景—百年台湾行旅」も見ることができた。顔水龍は、1922年から東京美術学校で学び、フランスのサロン・ドートンヌや台湾美術展覧会に出品、デザインやパブリック・アートも手がけるなど、戦後も長く活躍した画家である。

台湾の作家の作品は、遺族が大切に保管しつづけているものが多い。台湾では戦後、国民党政府が行政を引き継いだ際、公的機関に展示されていた近代美術作品が道に捨てられるなどの憂き目にあった。そのため、作家やその遺族は、自ら記念館を設立するなどして、作品を手もとにしているのだという。

韓国では、国立館や私立美術館に入っている作品も多く、状況が異なる。サムソンの私立美術館であるリウム三星美術館は、アジア現代美術(ちょうど韓国の現代作家、ス・ドホの個展が開催中であった)、欧米作家の作品がすぐれているほか、韓国近代美術コレクションも充実しており、李仁星の重要作を所蔵している。韓国国立現代美術館の別館である徳壽宮美術館では、生誕百年を記念した李仁星の回顧展(2012年5月26日—8月26日)と、近代美術のコレクション展示を見た。韓国国立中央博物館や景福宮も訪問し、芸術の殿堂(ソウル・アーツ・センター)にある書芸博物館で朝鮮美展とくに書の部門について調査した。

徳壽宮美術館は、李王家コレクションが展示されていた場所。李王家旧蔵品の多くは、現在、韓国国立中央博物館に収蔵されている。朝鮮王朝の王宮である景福宮の敷地には、朝鮮総督府が建っていた。戦後も総督府の建物は残され、中央博物館として使用された時期もあったが、1996年には完全に撤去されて跡形もない。建築部材の一部は、チョナンの独立記念館で見ることができる。

ともに調査を行った金恵信氏(青山学院大学講師)は、著書『韓国近代美術研究 植民地期「朝鮮美術展覧会」にみる異文化支配と文化表象』(ブリュッケ、2005年)のあとがきに、次のように書いている。日本の研究仲間たちと韓国への旅を重ねつつ続けてきた研究の「過程でわかったもっとも大きなことは、国境を越える文化の力を信じ、安易に一緒に未来を夢見ることができるという考えがいかに危ういものか、ということだった。「他者」の歴史や文化を理解することは、その共同体の持つ暗くて辛い記憶に眼を向けることでもある」(261ページ)。

それぞれの訪問先で、作品調査とともに、館長や副館長、学芸員、作家の遺族といった、さまざまな方々に話をうかがうことができた。植民地時代のことを語る彼らの話しぶりや表情には、興奮や、複雑な思いが混じるのが感じられた。そのたびに、金恵信氏の文章が頭をよぎった。

(すずき・よしこ/当館学芸員)